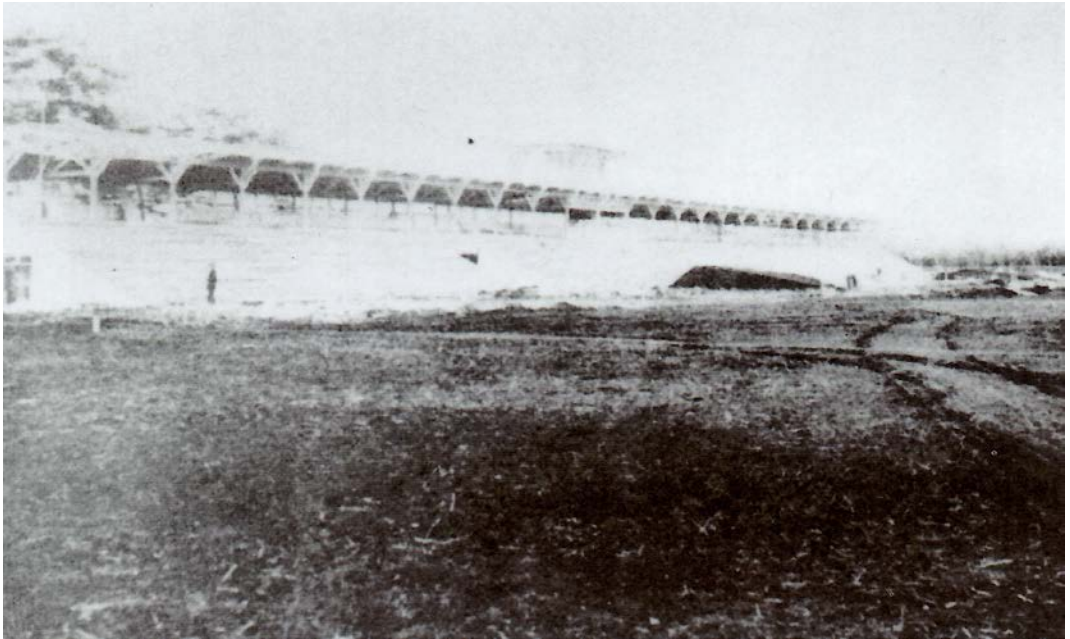




昭和 9 年建設中のメインスタンド

八王子競馬

八王子競馬の起源は大正時代の後半、南多摩郡小宮村中野で神社祭礼の余興「お祭り競馬」が始まりとされている。

昭和三年（一九二八）八王子競馬場がつくられたのが中野上町、現在の八王子市立第二中学校付近。一周千 m、幅十六 m の馬場が新設された。その年の十一月十七日、第一回「多摩八王子競馬」が幕を開けた。第一レースは、国産騎競争距離千六百 m、優勝馬は「キヨヒネ」であった。その後施設が手狭になったことから、昭和九年、小宮村と日野町にまたがる境に移転。昭和十年から十三年まで開催。入場者は一日三万人を超えたという。しかし、昭和十四年には日本軍の鍛錬馬場に。昭和二十一年に再開されたものの、昭和二十四年死亡事故が発生し、事実上廃止となった。翌年、神奈川県大井競馬場に移行することになる。

現在競馬場の痕跡は、公園内の大木と町境の通路だけである。

◇散歩のみどころ

JR八高線北八王子駅から高倉町、大和田一〜三丁目の凡そ5kmの行程。北八王子駅東口から東南方向に歩き、甲州街道に出て高倉稲荷神社へ。その隣り、大根の品質改良「高倉大根」を有名にした原善助宅へ。そのまた隣り、江戸時代に大きな立不動明王を担ぎ、川越から馳せ参じて新田開発に貢献した高澤宅へと至る。甲州街道を渡り、蛇明神、馬頭観音、古井戸、新田公園へと歩く。この辺りは、新田開発の悲喜交々の歴史が残っている。

そこから二十号線を渡る。八王子競馬場跡地、現在の八王子東高校、首都大学東京辺りを通り、浅川方面へと歩く。いぼとり地蔵、真福寺跡、刑場悲話が残る延命地藏尊へ。さらに、八高線を潜り、お穴様、新撰組にも関係する日枝神社、東光寺、旧甲州街道の石仏群から鍛冶屋敷跡を経て、大和田橋まで。ここで解散。

●高倉の歴史

新編武蔵風土記稿や武蔵名勝図絵によると、室町時代、この一帯は水の出が悪く、土質も良くなかった。そのため田畑には向かず、穀倉を置く程度の土地だったという。また、戦国時代には、相模国の北条早雲により攻められて、土地は一層荒れ果てた。日野の原（現多摩平、日野台付近）や高倉野（原）（現高倉町、大和田町付近）には二、三軒の農家があっただけだという。

時代は移り享保七年（一七二二）のこと、八代將軍吉宗が諸国に新田開発の命を出した。多摩郡も四十余の土地に新田が開発された。今の高倉町は、かつては粟之須村（現小宮町）といわれ、「粟之須新田」の開発に十六人が入植した。幕府からは、一朱二分の肥料代と一人一町二反の土地を与えられ、開墾が進められた。悪条件の中、新田開発は年々成功し、文政年間（一八一八〜三〇）には民

家や農家が二十一戸に増えていったと記されている。武蔵野新田（三多摩）の開発の担当者は、町奉行の大岡越前守で「新田開発の立役者」と言われたという。

高倉町の町名は、昭和十六年（一九四一）、旧小宮町が八王子市と合併した際に付けられたもの。

●高倉の街並の開発

新田開発時の街並みは、甲州街道を挟んで土地を南北に分けた。短冊型の細長い町割りとなっていた。道路に面して屋敷があり、その後ろに耕作地がある新田集落の面影を今も残している。井戸は、深く掘らないと水を確保出来ないため、二軒の間に一つ設置し、共同で使用していた。

①高倉稲荷神社

祭神 宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）

※「別称」倉稲魂命

社宝 阿弥陀如来坐像

薬師如来坐像

創建 享保三年（一七一九）

再建 天保三年（一八三二）

例祭 二月初午、九月十五日

高倉稲荷神社は、別名朝日稲荷大明神といわれた時代があったという。



古井戸（釣瓶井戸）

社務所には、阿弥陀如来坐像と薬師如来坐像が安置されている。粟之須新田（現高倉町）に勧請されたときから春秋の彼岸には、神社で女性中心の念仏講が続けられているという。また境内には、三本の幹に分かれた樺、大銀杏、檜の大木などが生い茂り、村の鎮守としての風格を担う一助となっている。さらに、富士講記念碑、大山講記念碑が建立されている。

また、火の見櫓のある神社としても知られる。



高倉稲荷

社務所に安置されている
薬師如来坐像



社務所に安置されている
阿弥陀如来坐像



火の見櫓





大山講記念碑



富士講石碑



高倉稲荷神社境内の大木



高倉稲荷神社境内の
大木の根

②高倉大根発祥の地

高倉町

かつての粟之須新田は甲州街道が横切り、街道筋に人家が見られるものの、周辺一帯は農地で殆どが農家で占められていた。織物産地の八王子を控えて養蚕も盛んであったが、一部では野菜類の生産も行われていた。冬十二月ともなると、あたりは真っ白な高倉大根が、各農家の干し場で陽を浴びていた。漬物用として名高く、八王子の代表的野菜であった。この高倉大根は、原善助の長年の品質改良によって生まれた新品種の大根であった。

原善助が大根の品質改良を始めたのは大正十年（一九二一）頃。その成果が認められてくるのは、昭和二十年（一九四五）の中頃からのこと。約四半世紀も努力した結果であった。本種は、生長も早く強い品種で、特に大根の大敵モザイク病（バライス）に対する抵抗性が強かった。

昭和二十一年（一九四六）各地にモザイク病が発生したが、本種はその抵抗性品種として推奨すべきものであるとの記述がある。研究と努力の結果がようやく報われたといえよう。昭和十二、三年頃には、この地域での大根作付面積も増えていった。晩秋から冬にかけてこの周辺では、真っ白な大根が庭先いっぱい、陽干しされた風景がみられたものである。戦後になってからは、練馬大根と並ぶ作物として、農林大臣の登録も受け、その名は日本全国に知られるようになった。今は団地や工場が増えたため、この地域での高倉大根の生産量は激減している。



大根干しの作業をする
原善助さん



大根のすだれ干し



大根干し作業風景

こうたくさんりやくいん

③高澤山 利益院

高倉町

高倉稻荷神社前の甲州街道を少し東へ行くと、高澤宅である。屋敷内に高澤山利益院が建っている。堂内には、室町時代末期の作と伝えられる立不動明王を、その右に衿羯羅童子（こんがらどうじ）、左に制叱迦童子（せいたかどうじ）が安置されている。不動明王は、左眼を半眼に閉じ、下の歯で上唇を噛み二本の牙を現すのが普通だが、ここの不動明王は両眼が開いた珍しいものである。享保十六年（一七三二）、新田開発の為に入植した十六人の内の一人が、この不動明王（約一m）を背負って川越からやって来て居を構えたという。高澤家の先祖は、修験者であったという。その後、文化十三年（一八一六）に堂宇を建立し、伊勢国世義寺を本山とする当山派利益院とし、立不動明王を安置した。現在の建物

は、昭和三十九年（一九六四）に再建されたもの。堂内の礼盤（らいばん）には、「文化一三丙子年造立 栗須邑施主 井上文平 立河村工主 鈴木勝五郎貞昌」、木魚台には、「大工柴崎邑勝五郎 塗師日埜宿四ツ谷榮吉」と記されている。現在、高澤家で管理している。



高澤山利益院全景

不動明王像



厨子に安置されている不動明王像

④ 蛇大明神

高倉町

甲州街道高倉町交差点の近くに、蛇大明神が祀られている社がある。かつて、荒廃した原野を開墾するなかで、毒蛇（蝮）に噛まれ命を落とした人達が多かったという。一方、蛇は畑の害虫を食べてくれるため、神様を奉り、毒蛇に噛まれぬ様、そして農作物の生育が良くなるようにとの願いを込め、社を建立したと伝えられている。



新田公園神社の蛇大明神

しんでんこうえん

⑤新田公園

高倉町

公園は、蛇大明神のすぐ南側にある。粟之須の新田開発を記念して造られた公園である。都市計画の一貫として、昭和五十一年（一九七六）十一月に開園した。同じ頃高倉南公園も開園している。昭和四十一年七月に開園していた高倉公園、高倉緑地などと合わせて、昔を偲ばせている。樹木は大きくなり、遊具設備も整い、住人の憩いの場となっている。



新田公園



高倉南公園



新田公園藤の花

⑥馬頭観音

高倉町

馬頭観音は、甲州街道高倉町交差点から少し西寄り、渡辺宅と川幡宅の境に安置されている。石碑には、文政三年（一八二〇）と刻まれている。かつてこの場所は、平山往還から稲城往還に通じていた道といわれ、旅人や馬の安全を願って建立されたと伝えられている。また一説には、過酷な労働に疲れた馬が、近くの井戸に落ちて死んだためその供養として建立したとも伝えられている。



馬頭観音

⑦八王子競馬場跡

八王子競馬の起源は大正時代の後半、南多摩郡小宮村中野で神社祭礼の余興「お祭り競馬」が始まりとされている。

八王子競馬場がつくられたのは昭和三年（一九二八）に中野上町付近、（現、八王子市立第二中学校付近）

一周千m、幅十六mの馬場が新設された。売上、収益とも高成績であり、施設が手狭になったことから移転先を求めた。昭和九年（一九三四）、小宮村と日野町にまたがった場所に移転新設された。

総面積 八万坪、馬場は二万坪。

コース 一周千六百m、幅三十m

建造物 千五百坪

入場者 一日最大三万人前後

昭和十年（一九三五）から十三年（一九三八）まで開催。昭和十四年（一九三九）には軍馬資源法により競馬が出来なくなり、鍛錬馬場として使用された。昭和二十一年（一九

四六）に再開されたものの、昭和二十四（一九四九）年九月第二回市営八王子競馬開催中死亡事故が発生し、事実上廃止となった。翌年、神奈川県大井競馬場へと移行していった。当時の八王子競馬場跡地付近には、八王子東高等学校や日野第四中学校がある。



繋駕速歩競走



騎乗速歩競走



八王子競馬大会を記念してはがきに押された消印



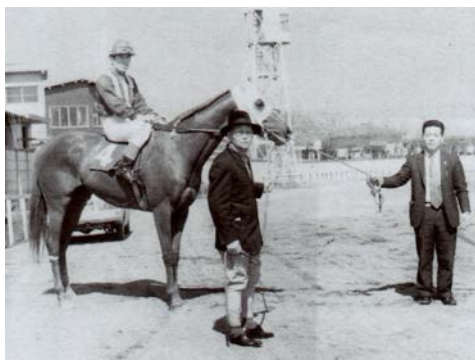
競馬場の位置



優勝記念写真



直線の追いくらべ



表彰式（1着賞金 83 万円
昭和 25 年 3 月



八王子競馬場

⑧ いぼとり地蔵

大和田町

いぼとり地蔵は、大和田町の旧豊田街道脇にある。

疣（いぼ）は、皮膚の上に突起した角質の小さな塊（かたまり）で円形または乳頭状の扁平隆起したものの原因の多くはウイルスで、伝染することもあるという。

八王子ではよく「絹糸で結わいときや、ポロつと取れるだんべえ。それでとれなきや、いぼとり様だ」といわれた。

昔は、村々の寺の境内や辻の脇にはいぼとり様が祀られていた。今でも八王子の寺田や大和田など数ヶ所に「いぼとり地蔵」が残っている。

⑨ 矢野山 真福寺跡

大和田町

宗派 真言宗智山派、宇津木村龍光
寺の門徒。

開山 年歴不詳。尊朝上人
開創 元和年間以前（一六一五）

古くは下大和田町にあった。往時は近くの関根神社の別当寺であったが、明治元年（一八六八）廃寺となった。寺跡かと思われる場所には、関根神社より旧道を南に行った民家の前に、数基の墓碑が立っている。この中に真福寺名の刻字および、「享保六丑年（一七二一）二月二十三日、



いぼとり地蔵

智元法師」と刻まれた墓碑が残っている。毎年十月には町内で、「真福寺跡」、「いぼとり地蔵」、「延命地蔵」の三ヶ所を供養している。



真福寺跡

⑩ 延命地蔵尊

延命地蔵尊は、真福寺跡の近く、高幡不動へ行く道の脇に立っている。江戸時代の頃、大和田橋近くにあった刑場から遺体や生首がこの地に流れ着いたという。哀れに思った村人が弔いをし、地蔵尊も建立したという。また近年でも、病にかかった人が一週間毎日願掛けをしたところ全快したという話もあったと聞く。



延命地蔵尊

⑪ 関根神社・日枝神社

大和田町

祭神 素戔鳴尊

関根筑後守光武

その子若狭守行久

創建 不祥

祭礼 八月十五日

小宮町粟之須の関根家の先祖に、関根筑後守光武とその子若狭守行久がいた。昔、浅川に大蛇が出現し、大暴れし、田畑を荒らし、牛馬や人を呑んだりした。行久は大和田河原に石積籠を積み、幣束を立て、大蛇が籠に絡みつき自由を失ったところを退治した。それからは、水害もなくなったという。そして二人は神として祀られるようになったといわれている。

この付近には伝説が多数残されている。男宮、川流れ、川守り、川荒れ、浅川の大鯉、明神はやし、明神護符、蛇の宮、巳年豊年、南天箸等などある。



関根神社・日枝神社

⑫ お穴様

大和田町

大正から昭和にかけて、八王子付近が桑の都、織物の町として栄えたころ、小高い雑木林の中腹に小さな洞穴があり、桑の葉の貯蔵庫として使っていた。しかし、この穴の付近に白い蛇が出て、不幸な出来事が続いた。

近所の住人により、大正十三年（一九二四）「妙法結社」を結成した。「お穴さま」の騒ぎが起きたのは、昭和三年（一九二八）のこと。現豊田街道の拡幅工事の際、丁度妙法結社の前まで掘り進んできたところ、ぽっかり穴があき、中に人骨が何体も発見され大騒ぎになった。「これらの遺骨は武田軍の落武者達がこのまま逃げ延びてきたが遂に力尽きたものである」という。以後持ち主の人たちで正月、五月、九月の十八日に礼拝式を行い守っている。

守護神は「妙観圓大善神」と「正
真稻荷大善神」である。



お 穴 様



武田氏紋 四つ割菱



社 内 部

⑬ 日枝神社

大和田町

祭神 大山昨尊

(おおやまくいのみこと)

創建 江戸中期以前

再建 昭和五十年(一九七五)

例祭 八月十五日

利益 厄除け、商売繁盛、

合格祈願、病氣平癒

鎮座 江戸中期以前、村の長老が江

戸赤坂の日枝神社に勧請し、

分身を賜ったという。

新編武蔵風土記稿によると「山王
社 社地、四十七間に三十間、村の

東よりの境にあり鎮座の初を知らず、

御朱印社領五石を賜れり、小社にて

南向なり。」と記されている。

神社の鳥居は明治二十三年(一八

九〇)四月吉日に設立され、平成八

年(一九九六)まで存在していた。

しかし、「日枝社」と彫られた石製扁

額にひび割れが入ったため本殿内に

保管されることになった。

この扁額の筆者は、金玉均氏。この人物は朝鮮半島に王政があった当時、宮廷革命に失敗し、同志と共に日本に亡命。辛酸を極めた亡命生活を過ごした高貴な人と伝えられるが、在日当時の記録は定かでない。

さらに幕末の頃、新撰組副長の土方歳三や一番隊長の沖田総司が京に上る以前、血気盛んな頃、山王さまの社で大暴れしたくだりが作家司馬遼太郎の「燃えよ剣」に描かれている。境内には稲荷神社が祀られ、住民の平穏を守護している。



日枝神社全景



稲荷大明神



日枝神社石製扁額

●大和田に落ちた隕石

今から二百年位前、八王子に隕石が落ちたことが伝えられている。

文化十四年（一八一七）十二月二十九日午後二時頃のことだったという。古文書によると、そのときの様子は、「光り物が空中を飛び」「天気は晴れているのに雷鳴のような音」「猟師の鉄砲の様な音が、煙草三服する間に三、四回」とし、さらに「空中に白気」「白雲を引くようなけむり」が現れたことを記している。落ちた場所は、「上野原金剛院の脇、忠七の麦畑」「大和田河原」「八幡宿」「新田高倉」など。

上野原金剛院の忠七の麦畑に落ちた隕石は「泥を四方に跳ね飛ばし、一・二メートルの穴があいた。みんな掘り出したところ、周囲九十センチメートル。外回りは黒く、割れていた」と落下時の様子を伝えている。この時隕石が落ちたのは八王子だけではなく、日野宿、日野本郷（日野

市)、落合村(多摩市)にまたがる広い地域だった。隕石の一部は、江戸在住の八王子代官、勘定奉行、若年寄らが見て、調査したという記録が残っている。昭和三十年ごろになって京都の土御門家の古文書の間から「八王子いん石の事」と書かれた紙包みが発見された。その中にはわずか〇・二グラムの隕石のかげらと書き付けが入っていたという。

⑭ 栄慶山 東光寺

大和田町

宗派 真言宗智山派

本尊 薬師如来

開山 尊朝法印

開創 元和年間(一六一五〜二四)

以前

縁起では、江戸期には大和田村山王社の別当寺栄慶山と号した。昭和二十年(一九四五)戦災により本堂消失。戦後、子安町福伝寺(現在明神町)の旧観音堂を移築し本堂として

使用していたが、その後再建された。江戸時代の初期、八王子代官大久保長安が幕命により甲州街道並びに沿道の道路改修を行った際、大和田坂に庚申塚を構築した。その塚の庚申塔や三界萬霊塔などが寺の入口前の道に移され安置されている。

昔、甲州街道の大和田坂を登り、向い原の地に高幡へ出る岐れ道があった。この道は、浅川の南を通る稲城往還より高幡不動尊へ行く道路であった。この岐れ道に、六間四方もある庚申塚があり、二本の大榎が高くそびえていて、青面金剛と三界霊塔二基があつたという。高幡不動尊に行くときに、この庚申塚をお参りしていたという。



東光寺



身代わり地蔵



庚申塔 三界萬霊



地蔵様

⑮ 旧甲州街道と

大和田の石仏

大和田町

大和田橋を東京方面へ渡り右折すると、二つの道に分かれる。右側が豊田街道といわれる道で、左側が旧甲州街道である。弓なりの緩やかな道で三百m程行くと大和田坂に至り、元の二十号線に合流する。この旧道沿いの住人に昔の話を伺った。「昔はさあ、田舎も田舎よ、馬車や牛がよ、通ったりしてさあ！今の交番脇あたりはなあ、鍛冶屋があつて馬の蹄鉄をトンテンカン、トンテン

カンやつていたつけ！浅川の用水が綺麗だったさあ！」

旧甲州街道の富士見橋を渡って少し行つた右側に、大和田中央会館がある。その前の道路に面した場所に、馬頭観音や地藏尊など石仏が整然と保存されている。また八王子空襲で亡くなった人の供養仏もあるという。大和田橋の歩道には、焼夷弾の傷跡を後世に残すため、色違いのタイルと強化ガラスで保存されている。そして、橋の北側を二百m西へ行つた堤防の脇が、江戸時代の処刑場跡である。



大和田の石仏

⑯ 大和田の渡し

大和田町

甲州街道から八王子の中心部に入る八王子の玄関にあたり、橋によつて往来出来るようになったのは、明治三十八年（一九〇五）からである。それ以前は、毎年四月より九月までは河越人夫を出して徒渉し、十月から翌年の三月は仮橋を作つて渡した。文化七年（一八一〇）の徒渉人足一人の賃銭は

- ・ 大股通水掛二尺程 二十文
- ・ 腰帶通水二尺五寸程 三十一文
- ・ 乳の下水三尺程 四十二文

との記録が残っている。



今の青嵐の桑都

⑪ 西行法師と浅川

西行法師は、平安末期の元永年間（一一二八）～建久年間（一一九九）の人である。歌僧。俗名は佐藤義清。法名は、円位。鳥羽上皇に仕えた、北面の武士であつたという。

二十三歳のとき、無常を感じて僧となり高野山へ。晩年は、伊勢を本拠に陸奥、四国などを旅し、河内国南葛城（現在の河南町）の弘川寺で没した。七十二歳。

述懐歌に優れ、新古今集には、九十四首の最多歌数が採録されている。西行塚が、寺町の長心寺にある。石碑に「飛鳥井郷染 西行塚」と刻まれている。その碑の脇には西行塚に因んで建てられたと思われる明治三十六年（一九〇三）建立の芭蕉の句碑がある。

西行の草鞋もかかれ栢（松）の露
この句は、長心寺の当時の住職滝見
泰道らが建立したもの。

西行法師は、二度ほど八王子を訪れているが、

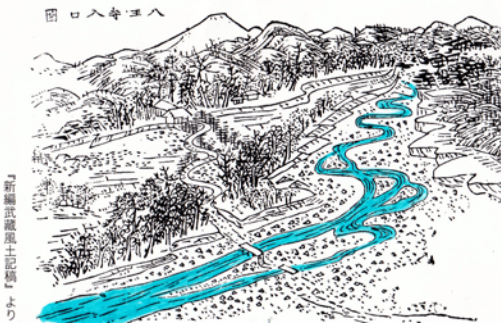
「浅川を渡れば富士の影清く

桑の都に青嵐吹く（円位）」

この歌がどこで詠まれたかは不明だという。

官位も妻子も捨て出家し、源平戦乱の中を生き抜いて来た西行は、諸国行脚の途中、浅川の土手から雄大な富士を見たとき、極楽浄土を見たのかもしれない。

江戸時代の大和田近辺



江戸時代の大和田近辺

西行法師

（菊池容斎画／江戸時代）



文治六年（一一九〇）春、桜が咲く
二月十六日、

「願はくは花の下にて春死なむ
そのきさらぎの望月のころ」

と自ら詠んだ歌のとおり、お釈迦様の悟に憧れていた西行は、かねてから釈迦入滅の日に死ぬことを望んでいたという。

◎主な参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図会
- ・八王子市史
- ・八王子寺院めぐり
- 八王子仏教協会青年部
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・日枝神社・東光寺・お穴さま資料
- ・八王子発見
- ・ふるさと八王子
- ・とんとんむかし 菊地正著
- ・いしかわ 高倉町会（五）
- ・八王子の歴史と文化
- ・八王子の今昔
- ・設立四十周年記念誌
- 八王子高倉町会
- ・インターネット各ページ
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ

—メモ—